

イヌの眼内メラノサイト腫瘍の病理学的検討

○大川内充輝¹、二瓶和美^{1,2}、長峯栄路¹、小野澤花純¹、柿沼陽子¹、内田和幸³

¹サンリツセルコバ検査センター、²日本動物高度医療センター、³東京大学大学院農学生命科学研究科・獣医病理

【はじめに】イヌの眼内原発性腫瘍ではメラノサイト腫瘍が最も多く、動物の WHO 分類では眼内メラノサイト腫瘍として前ぶどう膜メラノサイトーマ、輪部メラノサイトーマ、脈絡膜メラノサイトーマ、びまん性ぶどう膜メラノーマが分類されており、悪性メラノーマの分類はない。メラノサイト腫瘍は発生部位により臨床動向が異なり、口腔内や爪床部発生の多くは悪性であるが、眼内メラノサイト腫瘍の病理学的特徴と予後に関する報告は乏しい。本研究ではイヌの眼内におけるメラノサイト腫瘍 18 例について、病理組織学的特徴と予後との関連を検討した。**【材料と方法】**イヌの眼内メラノサイト腫瘍 18 例を用いた。組織評価は通常の HE 標本と脱メラニン標本を用いて細胞形態、色素沈着量、壊死の有無、浸潤性について評価し、腫瘍の増殖活性は核分裂頻度および抗 Ki-67 抗体を用いた免疫染色で陽性細胞を評価した。また全ての症例で予後調査を実施し、組織学的評価との相関を検討した。**【結果】**腫瘍細胞の形態は、類円形、紡錘形、不整形が混在する群と小型類円形～不整形細胞が主体に増殖する群で増殖活性に差がみられ、後方で核分裂頻度および Ki-67 陽性率が有意に高かった。またメラニン色素沈着量が少ないほど増殖活性が有意に高かった。壊死や浸潤性の有無は増殖活性とは有意に関連しなかった。予後は 18 例中 4 例が腫瘍関連死、1 例が安楽死で、これらの腫瘍では増殖活性が有意に高かった。**【考察】**今回調査した症例には腫瘍関連死が含まれており、WHO 分類上メラノサイトーマに分類される腫瘍にも悪性度が高い腫瘍が含まれると考えられる。予後不良の症例は腫瘍の増殖活性が有意に高く、重要な予後因子と考えられた。また組織学的には小型類円形～不整形の細胞形態およびメラニン色素の産生低下が増殖活性と有意な相関があり、診断時の予後予測にはこれら进行评估することが重要と考えられた。